

足枷から資源へ

—— ユタ評価の重層性 ——

濱 雄 亮

要 旨

1980年代以降の沖縄の民間巫者・ユタに対する評価の重層性について、「ユタの文化資源化」という視点から整理を行った。まず、ユタは、かつては沖縄の生活にとって「足枷」であるかのように否定的な存在として評価されることが多かったが、あたかも「資源」のように肯定的な存在として評価されることも増えてきたことが分かった。次に、評価者の立場と評価内容の交錯が明らかになった。この点に留意して各種のアクターの動きと相互関係を考え、政策的・商業的な文化資源化を批判的に分析する必要があると結論づけた。

キーワード：ユタ，沖縄，シャーマニズム，文化資源

1. 目的と方法

1.1 目的と意義

沖縄の民間巫者・ユタに対する様々な立場からの評価の動向を整理し検討することが、本稿の目的である。特に「ユタ評価の併存期」（後述）における評価の重層性について、「ユタの文化資源化」という視点から分析を行う。

ユタは、かつては沖縄の生活にとって「足枷」であるかのように否定的な存在として評価されることが多かった。しかし、あたかも「資源」のように肯定的な存在として評価されることも増えてきた。これは琉球・沖縄史上初めてのことであり、この変化の内実を理解する必要がある。

社会心理学の立場からユタを研究してきた大橋⁽¹⁾によると、ユタはこれまでに6回、禁圧にさらされてきた。その時期はいずれも琉球・沖縄史における大きな変動期と重なっている。大橋が挙げるこれまでの禁圧期は以下の6回である。

17世紀後半：向象賢の政治改革⁽²⁾

18世紀前半：蔡温の政治改革⁽³⁾

サイバー大学授業サポートセンター・メンター

原稿受付日：2010年10月12日

原稿受理日：2011年2月10日

19世紀後半：廃藩置県⁽⁴⁾

1910年代：“ユタ征伐”⁽⁵⁾

1930-40年代：“ユタ狩り”⁽⁶⁾

1980年代前半：トートーメー問題⁽⁷⁾

これらを概観して大橋は、「ユタ禁圧の背景には（中略）日本の影が存在」し、さらにそれは、「日本の側からの直接的な支配＝統制」もしくは「沖縄の側からの日本の価値体制への準拠＝同化」という二通りに分類できるという。ここにみられるユタ禁圧の論理に共通するのは、ユタは非合理的論理で人を惑わせ出費を嵩ませる旧風俗・慣習の保持者であり、時として情報統制攪乱者になるから不適切である、というものである。

しかし最後の禁圧期の前後には、それまでにないほどユタを肯定する意見も併存していた。この時期以降が、本稿でいう「ユタの評価の併存期」である。

1.2 ユタとはなにか？

ユタとは、主に沖縄県や鹿児島県奄美群島地域において先祖祭祀や供養、心身の不調、家相や墓相などについての個人・家庭からの相談を受けたり、儀礼を指導・執行したりするシャーマンの職能者の総称である。多くは中高年の女性であり、幼少時や青壮年期に原因不明の心身の不調（巫病・カミダーリ）や家庭的・個人的不幸を経験している。その過程で、年長の女性親族などがユタに相談に訪れることがある。そこでのユタの指示や解釈の影響を受けるうちに次第に不調が軽減されたり、あるいは不調に対する宗教的意味づけが確立されたりすることがある。その後は本人自身も次第にユタと見なされるようになり、望むと望まざるとに関わらず結果として巫業に携わるようになることがある。

「ユタ」という呼称には、「いい加減なことを言う」といった侮蔑的なニュアンスが込められることがあり、通常はユタ自身が自称として用いることや、クライアントがユタの面前で用いることはない⁽⁸⁾。しかし研究史やマスメディア上においては「ユタ」という呼称が最も一般的であり、クライアントもユタ本人がいないところでは用いることがありうる。そのため、侮蔑的なニュアンスを込めて用いるのではないことを断った上で、本稿でもこの表現を用いることとする。

1.3 本稿の構成

次章以降では、ユタへの評価のしかたと立場を3つに分け、それぞれの特徴を検討する。まず第2章では、「外からの肯定」と題して、シャーマニズム研究の立場からのユタ論を取り上げる。研究者の立場からのユタ論としては最も歴史的蓄積がある分野である。中心となる分野は文化人類学と民俗学と宗教学であるが、歴史学や、フィールドワークを伴う社会心理学の立場からのものもある。

次に第3章では、「内からの否定」として近代化推進の立場からのユタ論を取り上げる。中心となるのは競合的専門家らによるものである。ここでいう競合的専門家とは、提供す

る役務において結果としてユタと競合する弁護士や宗教家などである。ユタのどのような点が彼らによって指弾されるのかを検討する。

最後に第4章では、「内からの期待」として「ユタ評価の併存期」に現れた協働的専門家や行政・一般の立場から発信されたものを取り上げ、ユタのどのような点が評価されるのかを検討する。ここでいう協働的専門家とは、ユタの視点を部分的にであれ活用しようとする医師などである。

第5章では、以上の事例に基づいて、ユタ評価の重層性を整理する。

2. 外からの肯定：シャーマニズム研究の立場から

2.1 日本におけるシャーマニズム研究

ユタ研究史を概観する前に、日本におけるシャーマニズム研究の流れを確認する。日本における議論は、エリアーデ⁽⁹⁾らによるシャーマンの脱魂体験研究や、ルイス⁽¹⁰⁾による憑依の社会的機能の研究に代表される欧米における宗教学・宗教人類学の研究動向の影響を受けて推進された。

これらの議論を受けた櫻井徳太郎⁽¹¹⁾は、日本におけるシャーマニズムの実態の体系的理解と、日本の民族信仰の原初形態や歴史の探究を試みた。櫻井によると、修験者などのシャーマンは死者の口寄せを行わないのに対してイタコやユタなどはそれを行うという。なお、後者の方が伝統的であったとした。

佐々木宏幹⁽¹²⁾は、超自然的存在との接触の方法によってシャーマンの分類の理念型を示した。一つは、霊魂観・世界観が明瞭であり、人間が神を訪れる神中心の脱魂型である。もう一つは、それとは対照的に霊魂観・世界観はさほど明瞭ではなく人間中心の憑霊型である。また成巫過程による分類としては、超自然的存在による肉体の解体とシャーマンとしての再生を経る召命型、先代シャーマンの死後（あるいは職能遂行能力喪失後）の巫病による世襲型、修行によって異常心理状態の制御能力を身につけることによる修行型の三つを提唱した。前二者は超自然的存在から人への働きかけであり、社会全体におけるシャーマニズム文化の影響力が強い。一方後者においては前二者ほどの影響力は持たないのではないかという。

「シャーマニズムによる治療」という枠組みは前提となった感があったが、インドネシアで調査を行った奥野克巳⁽¹³⁾は、シャーマニズム研究ではシャーマン行為が心身の異常を治す、いわゆる“治療効果”が期待されているとの暗黙の前提があったと指摘した。しかしシャーマニズムの手続きは、症状をシャーマン以外の人には不可視な次元の出来事に置き換えてその出来事の処理するのであり、「科学的医学で言うところの『治療』と同じではない」と批判した。奥野によるとこれは、シャーマニズム研究は西洋近代の災因論——病気は病者の身体器官に直接働き掛けて治す——を無意識的に当然の前提として採用してしまっていたのであり、知の植民地主義への加担につながるという。

宗教学者の池上良正⁽¹⁴⁾はユタらを「民間巫者」と名付け、彼らを『『霊威的次元』の自

律的主導性の内に生きる宗教者」と位置づけた。「靈威的次元」とは以下のようなものである。

日常経験とは異なる次元に属しながら、なおかつ、日常経験を補強し、リアルな意味を付与しうる知識・表象・力が生成され、獲得される時空の地平をさす。それは宗教現象を担う人々の具体的な信仰作用を介して顕れる次元であり、本書の課題に即していえば、人々の「祈り」「祀り」「死者供養」「呪い」「修行」等々の信念や実践を介して現成する。

池上は、以前の諸研究は「民間巫者を正当な宗教者として認める視点は乏しかった」ため、その民間巫者の周りの現象を改めて宗教学的な考察の俎上に載せる必要があると指摘した。

塩月⁽¹⁵⁾は、「シャーマニズム復興論」として、近代以降においても宗教生活が生成・持続することを述べ、世俗化論を棄却した。これは、「癒し」や「民族的アイデンティティ」の希求に対してユタが答えている現状や、そこにおける村落共同体を越えた世界の中に自らを位置づけることに伴うユタ文化の変容についての調査に基づいた議論であった。また塩月⁽¹⁶⁾は那覇市にある神社・沖宮のユタ的女性祭祀による靈性ネットワークについても分析しており、巫病に悩む人に交流の場を提供するという伝統的なスタイルと親和性の高い活動と、アイヌとの交流や沖縄における新靈性運動のリーダーの一人と交流と連携を行うといった現代的な側面の顕著な活動の両立を報告している。

このように、日本におけるシャーマニズム研究では、国内外のフィールドワークに基づいてシャーマンの超自然的存在との接触のスタイルや成巫スタイルの分類や社会的意義が議論されてきた。調査・研究の蓄積に伴い、その分析視角も精緻化されてきた。その際によく参照されたシャーマンの一つがユタであった。

2.2 ユタ研究

ユタに関する研究は、近代的学問体系の形成に促されて始まった⁽¹⁷⁾。1970年代以降には、前節の冒頭で述べた理論的関心に基づく研究が特に盛んになった。これまで扱われてきたテーマには、ユタ自身とそのクライアントや地域社会との関係性・機能・類型の研究⁽¹⁸⁾、ユタの歴史の研究⁽¹⁹⁾、ユタ・ノロの語りと文学（古歌謡）の発生についての研究⁽²⁰⁾などがある。それらを概観すると、ユタは、日本・奄美・沖縄の「古層」の手がかり、シャーマン、宗教者、として記述されてきたといえる。その議論においては、以下のような枠組みの問いと答えが提示されてきた。

まずは、政治権力からの弾圧・蔑視にも関わらず存在し続ける理由や、地域社会の中における機能はいかなるものか、という問いである。これについては、政治・家庭・祭祀・アイデンティティ上の不安解消を果たす、近代的枠組みで解決できない・したくない問題への意味付け（の変換）を行うもの、という回答が与えられた⁽²¹⁾。

次に、琉球・沖縄宗教史上の位置付けや他の職能者との関連はいかなるものか、という

点である。これについては、系統としては王国祭祀を司るノロとは関連があり、他の職能者とも競合しつつも相補的な一面をもつ、とされた⁽²²⁾。

更に、シャーマンの職能者としての形態の議論においては、地域的偏差はあるが脱魂は稀で、加齢・場面に応じて超自然的存在との交流形態は変化するものであり、シャーマンとするかどうか議論が分かれた⁽²³⁾。

最後に、近年ではユタの変容や現代世界との関係の諸相も注目を集めている。個人化やグローバル化といった現代社会におけるユタの活動の変容については、ユタ自身・クライアント・「沖縄」についてのアイデンティティの再構築を志向していると結論づけられることが多い。総じて動態性への注目が高まっているといえる⁽²⁴⁾。

こうした研究群は、ユタへの肯定的なまなざしに貫かれている。それは、琉球王国や日本政府といった権力側からではなく、村落や都市における生活の観察から研究がスタートしているためであろう。そのため、そうした生活者を支え、彼らに宗教的世界観を説く文化の再生産者としてのユタ、という視角が形成されたものと考えられる。

3. 内からの否定：近代化推進の立場から

前章では、沖縄の外部から訪れた研究者達が、肯定的なまなざしのもとでユタを研究して生み出してきた成果について概観した。本章では、「ユタ評価の併存期」前後やそれ以降の沖縄内部の近代化推進の立場や、ユタと部分的に競合する近代的専門家たちによるユタ否定論を紹介する。

3.1 「正しい信仰・合理的な思考」を目指す知識人

1950年代後半以降、新聞記事にはユタの「非合理性」を糾弾する記事が載るようになった⁽²⁵⁾。

「ユタのメッカ屋ヶ名現地ルポ」（琉球新報・1959.1.11）では、ユタが多いといわれる本島中部の屋ヶ名が取り上げられている⁽²⁶⁾。ユタが唱導する、人生儀礼・農耕上のタブーなどは非合理的で止めるべきであり、経済的向上や科学的知識の普及によって達成すべきであるとしている。しかし、屋ヶ名以外の土地からユタを訪れる人が多いため、ユタは一向に減らないという問題もあわせて指摘されている。

山城正二「ユタを一掃しよう」（琉球新報・1959.1.12）は投稿論文であり、筆者は教員である。彼は、ユタの治病・金運招来などの活動は「ばかげた根拠のないこと」であり、精神的支柱たる宗教の道に逸れており、「完全な理性の作用」によって宗教の暴走を防ぐべきであるとする。さらに、ロケットなどの“科学”を強調し、それに期待する気持ちを表明している。

照屋寛範（沖縄バプテスト連盟理事長）「ユタについて——正しい信仰が必要——」（沖縄タイムス・1959.8.21, 22, 25, 26, 28, 29）では、過去のユタ取締りが成功しなかった例を挙げ、「迷信打破運動は、真の宗教運動の外にない」とする。筆者は、霊が人に憑い

てメッセージを与えること自体は否定しないが、ユタの問題点は低い霊・悪鬼悪霊のいうことを鵜呑みにする点であるという。

石垣毅「正しい信仰生活を：迷信打破で生活合理化」（琉球新報・1959. 11. 15）では、ユタや新宗教・迷信の問題点として、出費や生命・健康上の危険、経済活動への支障を挙げる。これを克服することで明るい合理的生活を目指すべきだという議論である。沖縄の戦後の復興や医療など科学技術の世界的発達といった成果と対比して、ユタなどの非合理性を指摘し、そもそも宗教は精神的安らぎ・明日への希望を与えるものであるはずであるとす。

与世盛智郎（西本願寺開教使）「迷信打破について」（沖縄タイムス・1966. 4. 12）は、発達した科学技術に見合う文化を持った沖縄を目指すため、迷信を打破することが必要であると説く。迷信打破の阻害要因は、慣習の中に組込まれていること、奇跡を好む人間心理、新旧思想の衝突への恐れ、実業家・政治家が事業・政治上の理由から妥協する、という点であるとし、その克服には「知識の養護と共に感情の発達を完全ならしめ」、科学を否定せず、感情を正しいものに発達させる「正しい宗教への知識を与える必要がある」とする。

1980年には『青い海』誌上にて特集「ユタと迷信と祖霊信仰」が組まれた。「トートーメーと男系相続」を寄稿した新里恵二は弁護士である。新里はまずユタ信仰の原因を、衣食住・精神生活上の不幸と、超越的なものにすがりたくなる社会的雰囲気求める。次に、トートーメー問題に関連して、新民法の平等の理念の啓蒙の不足と政治・社会的権利意識に比較して生活上の権利意識の不足、という問題点を指摘した。そして、そうした問題は法廷などの公共的場で問題化することで解決に向かうとする。その上で科学的・学問的考え方を「気長に啓蒙活動」して広めることも重要であると論じている。なお、トートーメー問題の問題化自体は沖縄の女性の成長の証であり喜ばしいとし、さらに「この芽を大事にして、沖縄県を含む日本に、男女平等の原則が、相続の面でも、祭祀の面でも定着するように、ご勉強頂き、ご努力いただきたい」と述べる。このことから、“日本の一員”という視点に立脚していることがうかがえる。

友寄静隆は1981年の著書で牧師という立場からの祖先崇拜の是非と、自分がキリスト教徒であることを見知らぬユタから言い当てられたと母から聞いた驚きから、この研究を行った。

1981年には、『なぜユタを信じるか』という書籍⁽²⁷⁾が刊行された。本書は、ユタ本人・ユタのクライアント・もとはユタのクライアントであった人へのインタビューと、本島周辺離島での無作為抽出・講演会後の配付によって実施したアンケートからの知見が主体である。ユタの人格への評価と信仰スタイルへの批判が目立って見られる。ユタ信仰がよくない理由をいくつか挙げ、ユタ信仰が流行る理由として「生活の安定度に比べて精神面の方が不安定」で「慰めと希望が必要な」人が、霊能による一時の慰めを欲するからであるとした。女性に多い理由を、家庭の運営者であること、周囲の勧めの存在、周りの男性が無知・無責任・無信仰であること、とする。その対応策として、思想と信仰の確立、特に

ユタに流れやすいとされる女性本人とその周りの男性の無知・無責任・無信仰を改めるべきであるとする。また、トートーメー問題については、死・葬祭に正面から向き合わないからユタや親族の介入を招き得るのであり、遺書を残すことを勧める。

1983年の『新沖縄文学』の特集「ユタとは何か」には弁護士の新垣勉「非信仰者とのトラブル」を始め、歴史学者（高良倉吉）・心理学者（大橋英寿）・精神医学者（高江洲義英）・民俗学者（山下欣一）・詩人・弁護士が寄稿している。

新垣はユタ関連のトラブルを、①ユタとクライアント、②クライアント自身、③クライアントと他者、④ユタ「信仰」者と非信仰者、の四つに分ける。新垣はユタの行う“呪術”自体でなく、それが対象とする範囲について問題化する。つまり、個人の内面の信仰に止まらず対外的行動に関してもユタに規範を求めるからトラブルが起こるのであり、親族・家族のニーズには、「自律的人間像を前提とする」近代的規範で対応すべきであると主張する。

3.2 女性たちの声：「トートーメー問題」以降

トートーメーとは位牌のことで、その継承・祭祀にはいくつかのタブーがあるとされる。本書は琉球新報紙上の男女差別を扱った特集の中のトートーメーに関する記事への反響から生まれ、沖縄の各界を巻き込んだ論争を当の琉球新報社がまとめたものである。

このキャンペーンはもともと意図されたものではなかった。1980年1月1日から琉球新報が社会面において「うちなー・女男」という連載を行った。その第2部が「トートーメー」であった。トートーメーとそれに伴う財産の男系継承について取り上げられたところ、多くの反響が寄せられたという。財産やトートーメーの相続における女性差別、男児の希求といった女性差別への批判から、それらをユタが助長していること、またそれを利用して財産を狙う人もいるということから、ユタ批判に次第に方向はシフトしていった。そして、婦人団体・弁護士会・学会から、ユタの非合理性・非歴史性・非民主性を指摘する声上がり、戦後最大のユタ批判の潮流をつくった。

読者の後押しを受けて始まったキャンペーンの成果は書籍『トートーメー考：女が次いでなぜ悪い』にまとめられた⁽²⁸⁾。本書では、ユタが代表する前近代的文化と、“トートーメーは女でも継げる”と唱える読者・識者が代表する近代的文化の対立という構図が提出されている。

なぜトートーメーの問題化がこの時期に起こったのか。藤崎康彦⁽²⁹⁾によると、日本復帰後の幻滅から日本人というアイデンティティ形成の試みが挫折したため、沖縄の古代から系譜を引いているものというアイデンティティを形成することに寄与するトートーメーへの執着が起こり、問題化したためであるという。

その後も、女性達の経験に基づくユタへの懐疑論が出されている⁽³⁰⁾。

3.3 まとめ

ユタはまず何よりも、弊害であり克服すべき存在、すなわち足枷として指弾されている。

その指弾には二通りある。

一つは、自分自身の足に足枷がついているわけではないが、科学や特定の宗教の信仰を既に内面化した上で、知識人の立場から、ユタが多くの人や沖縄全体にとっての足枷になっていると批判する場合である。この場合、弾圧や蔑視にも関わらずユタが存在し続ける理由を探ろうとする態度も持ち合わせる者もあり、人類学・宗教学の研究成果を資料として使う場合が多々見られる。ユタを全否定はせずその存在理由を認めた上で、そうした状況を生む社会を批判するという方向へ向かうこともある。

もう一つは、自分自身の足に足枷がついており、そこから脱却するために近代的思考や手法に自ら助力を求めようとする場合である。代表的な例は、位牌・遺産継承を巡っての親族間の諍いにユタが関与することへの非難が多く見られるトートーメー問題についての女性による投書である。

4. 内からの期待：協働的専門家と一般・観光客に向けての立場から

前章では、沖縄内部の近代化推進の立場からのユタ否定論を検討した。本章では、沖縄内部からユタに寄せられる「期待」について、確認する。

4.1 臨床医学の立場から

本節では、「ユタ評価の併存期」前後やそれ以降に多く見られる、精神医学と心理学からのユタ言説について取り扱う。

山里昭子⁽³¹⁾は、ユタを、「霊能力を用いる職業占い師であり、沖縄の信仰生活の中心たる祖先崇拝と強く結びついている」存在と位置づけ、「さまざまな形でクライアント及び家族はユタとかかわりを持っている」という。そこで、沖縄本島南部の精神病院の新来患者90名についての問診を行った。それによると、来院前におよそ半数が医療機関を、半数がユタを訪れており、患者のためにユタを訪れたのは周りの女性が多いという。ユタの病因論は超自然的なもの（例：神や祖先とのトラブル）が多く、病因を患者個人に求めない点が現代医学との相違といえる。ユタの治療法は拝みである。こうした調査結果から山里は、「患者の治療は医療関係者のみが治療しているのではなく、宗教もその一部である医療以外の部分の関与が必要であろう」と結論づけた。

精神科医の高石利博⁽³²⁾は、先祖への尊崇と畏れを背景に、患者・家族を含む民間に対する影響が最も大きいのはユタであると見て、ユタと医療者の理想的関わり方を求めた。高石はまず、入巫に不可欠とされる“カミダーリィ”に着目し、この語の用法の特徴として「フリムン（狂人）を疎外しないような言い方として」用いられることがあることを指摘した。さらに、人々が心身異常の超自然的解釈を求める原因として、厳しい生活歴と「アニミズム的宗教雰囲気」を挙げた。「カミダーリィで救われている面が有るとしたら、精神科医療は、それに代わって、彼女達に心の平和を本当に与えられるか」、「ユタの方でも精神科医療を認めているのであるから、我々もユタグトゥと無視は出来ない」、と自省

している。

吉良安之⁽³³⁾は臨床心理学の立場から、ユタの宗教的面接と臨床心理学的なカウンセリングを比較し自己のカウンセリングを相対化するため、2人のユタを買った⁽³⁴⁾。その経験から、ユタの宗教的面接の特徴を挙げた。まず、クライアントのことを超自然的方法で“当てる”ことでラポールを形成し、面接場面をリードするのは一貫してユタである。やりとりにおいてはクライアントの悩みを別の(=超自然的な)文脈に変換し、新しい文脈の問題を解決する具体的方法を提示するのであり、その文脈変換の意味づけを課題として挙げた。

精神科医の高江洲⁽³⁵⁾はユタを、卜占・祈願・口寄せなどを行う民間巫女とし、社会的地位・機能などについてノロと対比させて理解している。他にも狂気観と語彙の問題などを論じているが、最終的には、「このような古層の島の知恵に、近代精神医学の知識を融合させていくという過程も今日の精神医学の展開法の一つ」とする。

社会心理学者の大橋⁽¹⁾は、心理学的枠組みでユタの「実質的合理性の側面」を研究した。ユタはクライアントの「不安・葛藤の原因を相手の価値・信念体系にそって意味づけし」認知構造の再構築を図る、という点が精神分析家の手法と類似するとする。

この分野における研究は、戦後沖縄の人々が精神科医療に患者として関わる際に、医療とユタを同次元の治療システムと理解していることへの対処を探る精神科医たちによって始められた。患者・家族のため、というスタンスから出発したがゆえに、具体的な形は提示できないまでも、近代医療とそれ以外の医療としてのユタが時には手を取り合うこと、すなわち協働することの実質的有効性について言及するに到る。さらに近年においては、いったん成立した近代医学や臨床心理学の再構築のための足場の一つとして見られるようにもなった。

4.2 文学者の立場から

沖縄の映画と文学におけるユタ表象について分析した塩月⁽³⁶⁾は、1990年代以降には、沖縄を舞台に沖縄の作家が書く小説において、ユタを中心とするシャーマニズム文化が再評価されているという動向を指摘した。これは塩月によれば、個人の霊性とその向上を重視する欧米のニューエイジ文化や、日本における癒しブームと通底するという。こうした現象は映画においても共通しており、文化復興運動としてのシャーマニズム表象であるとした。

その好例として、池上永一⁽³⁷⁾の諸作品がある。1998年に『バガージマヌパナス』でデビューした池上は、1970年に那覇に生まれ石垣で育った作家である。『バガージマヌパナス』は、気ままに生きてきた少女が神に召命されてユタになる成巫過程の苦しみや、巫業に取り組む中でユタとしての使命感ややりがいを見いだしていく、一種のビルドゥングスロマン作品である。こうした池上の作品においては、「神に選ばれる苦悩がとても明るい軽快なタッチで描かれている」⁽³⁸⁾。そのためか、同作品は漫画にもなっている⁽³⁹⁾。

4.3 一般住民・観光客に向けて

4.3.1 沖縄タイムス (2001. 1. 1) : 「ユタ新時代 癒し人に変化 増える修行者 自我の模索も」

記者は冒頭で、情報化・グローバル化とユタの変化を指摘している。以下のような小見出しが掲げられている。

- ・「沖縄は今年、大きな実なす」……斎場御嶽でベテランユタがサミット・沖縄の文物の世界遺産登録を視野に入れた拝み～判断をする姿とその支持者の存在について。
- ・「言いなりはだめ 自分で判断して」……夫の理解のもと、ユタの示唆もあり心が落ち着くから拝みをし、将来はユタとしてカウンセラーのように人助けをしたいという中年女性について。
- ・塩月亮子「ユタの将来像 支持集める精神的支え」……ユタの柔軟性・変革性が人々の“癒されたい”というニーズを満たしてきたから存続しており、近年では自然科学・ニューエイジ用語の多用・沖縄（人）の位置付けの土俵の変化を通じた民族的アイデンティティの再構築機能を指摘する。
- ・「ユタあれこれ①実数はつかめず」……ユタを「祖先霊や神霊などの超自然的存在と直接、間接に交流することで、宣託や占いなどの特異な能力を持つとみなされている人の総称」とし、成巫の不本意さや歴史性・普遍性を指摘している。
- ・「ユタあれこれ②サービス業か宗教団体か？」……タウンページ、国勢調査、宗教法人法登録上とユタについて述べられている。

「言いなりはだめ」という記事に見られるように、手放しで礼賛するわけではないが、総じて肯定的に取り上げていることが分かる。この記事は元旦の特集記事であることも注目に値する。

4.3.2 県が運営する文化系ウェブサイトへの掲載

本ウェブサイト⁽⁴⁰⁾は、「沖縄の持つ多くの分野における情報を文化遺産、文化情報として保存し、次代に継承しようとする」ことを目指すサイトである。ユタについては、“沖縄の祭りと年中行事”→“Study—学ぶ—”→“祭りを司る女性”とたどることで探すことができ、ユタについては、神がかりによって神・霊とのコミュニケーションし、祖先祭祀の上の占い・吉凶判断をする職業的霊能者であると説明している。

このように、県が運営するウェブサイト上でも肯定的に紹介されている。

4.3.3 観光ガイドブックにおける記載

本書は、沖縄を旅する旅行者向けのイラストを多用した実用的方言ガイドブック⁽⁴¹⁾である。第1部はイラストと標準語と沖縄の方言によって多くの項目が説明されている。第1部の、“文化”→“神事・風水”→“神事”の項に、「民間の巫者 ユタ」と記されている。

第2部は「沖縄で楽しく会話するために」と題した文章であり、「ウチナーンチュが信

じるもの」という章の中にユタの項がある。それによると、ユタは悩み事の相談を受けたり先祖のメッセージを取次いだりする職能者と説明されており、そこから相談者が安心を得るとしている。ただし、結婚や商売上のことをユタに相談することからくる弊害についても指摘されており、先述の沖縄タイムスの特集記事と同じく手放しで礼賛しているわけではない。

4.4 まとめ

前章で取り上げた論者らの主張においては、前近代的な排斥されるべき論理とされたユタの論理が、今度は、近代的な論理の欠点を補う“癒し”の職能者・アイデンティティの導き手、沖縄の文化的特徴の一つとして注目されるようになっている。

既存の医学に飽き足らない精神科医や、精神的な支えを求める人々、それを見守ろうとするマスコミが、ユタを資源と見なしているといえる。

5. 考察と結論

第3章と第4章では、具体的なユタ評価について検討した。本章では、それらを文化の資源化という営みの一つとして整理する。

マダガスカルにおける「祖先伝来の」葬送慣行の文化資源化について論じた森山⁽⁴²⁾によれば、『文化資源』とは、『文化』を『資源』として動員し、利用する営みに関わる用語であり、ある特定のものを資源として活用する行為とそれがなされる場の具体性を可視化する際に有効な概念である。そのため、地域メディアや学術誌といった場において生起しているユタの資源化の様相を理解するためには非常に適している。

森山は、何らかの意図のもとに資源化されたものをめぐる政治学の分析に際して必要となる問いを四つ挙げている。それは、資源化を、誰が、誰の文化を、誰の文化として、誰をめぐらして行うのか、という四つの問いである。その問いと回答の選択肢は、本稿の場合では表1のようになる。

表1 「誰」をめぐらする問いにおける自他の交錯

誰が	誰の「文化」を	誰の「文化」として	誰をめぐらして
自分が／他者が	自分の「文化」を／ 他者の「文化」を	自分の「文化」として／ 他者の「文化」として	自分をめぐらして／ 他者をめぐらして

私見では、この枠組みは、第4章で検討したユタの資源化だけでなく、第3章で検討したユタ否定論にも応用可能である。ユタ否定論は、ユタを負の文化資源と見なしたものであるからである。実際に応用してみると、表2のようになる。

順にこの表2を解説していこう。まず、「誰が」の問いである。否定論を述べる女性は、自分自身の身に降りかかったこととして発言をしているので、彼女たちの場合は「自分が」ということになる。他にはユタ自身やクライアントからの発言はない。そのため、否定論

表2 「誰」をめぐる問いにおける自他の交錯：ユタ論への応用例

	誰が	誰の「文化」を	誰の「文化」として	誰をめがけて
女性による否定	自分が	自分の「文化」を	自分の「文化」として	自分をめがけて
知識人による否定	他者が	自分の「文化」を	他者の「文化」として	他者をめがけて
医療従事者による肯定	他者が	他者の「文化」を	他者の「文化」として	自分をめがけて
池上文学における肯定	他者が	自分の「文化」を	自分の「文化」として	他者をめがけて
地方紙による肯定	他者が	自分の「文化」を	自分の「文化」として	自分をめがけて
県のウェブページによる肯定	他者が	自分の「文化」を	自分の「文化」として	他者をめがけて

を述べる女性たち以外は、この問いについては全て「他者が」という回答になる。

次の問い、「誰の『文化』を」では、医療従事者は、ユタを自分たちの文化とは見なししていないが、その他の発言者達はいずれも自分自身の所属を「沖縄文化」に求めているので、ユタを「自分の」文化として発言しているといえよう。

3つ目の問い、「誰の『文化』として」はどうか。女性達は、自分自身が否応なく巻き込まれたものではあるが、当事者として否定的な意見を述べているので「自分の」ということになろう。知識人達は、科学や他の宗教の枠組みから発言しているので「他者の」である。自分の文化の中にあるけれども切り離したいもの、という扱い方である。医療従事者も、ユタを他者と見ている点では同様である。池上文学や地方紙の議論、県のウェブページについては、前の問いと同様に「自分の」として取り上げられている。

最後の問い、「誰をめがけて」はどうだろうか。女性達と知識人、そして地方紙は、自分を含む沖縄県民に向けて語っている。また医療従事者は、自分を含む同業者に向けて語っている。県のウェブページは、「国内外」に向けた発信であると宣言しているので他者に向けられたものである。不特定多数に向けて出版される池上作品も同様である。

以上のように、ユタ評価の併存期における評価の重層性の内実が明らかになった。この枠組みを適用してまず気づくのは、ユタ本人やクライアント自身、すなわち当事者の発言は決して多くないということである。次に、評価者の立場と評価内容の交錯である。すなわち、医療従事者のように肯定的な立場からの発言であっても「他者の」文化として言及することもあれば、女性達のように否定的な立場からの発言であっても「自分の」文化として言及することもある、ということである。

政策的・商業的な要求に基づく文化資源の掘り起こしは、世界遺産指定を求めているものなど、各地で見られる。合掌造り集落がある白川郷では、景観の悪化（土産物屋の林立など）と景観の改善（電線の地下埋設など）が同時に起こっている⁽⁴³⁾。開発や反開発など、結論ありきの議論ではなくその動態的把握に向けて、各種のアクターの動きと相互関係の批判的分析が必要である。本稿で確認したように、現在では地方紙や県のウェブサイトのような大きなメディアもユタを資源とみなす論調にシフトしている。近年ではユタに言及するウェブページも増えている⁽⁴⁴⁾。そうした状況下においては、動態性を捕捉することが必要となる。本稿はその第一歩であった。

新たな課題としては、重層性の背景とインターネット上に存在するユタ本人やクライアント、すなわち当事者によるウェブページ上での発言についての分析である。また、文化の資源化は多くの地方において起こっているため、他の地方との比較による理解の推進も必要になるが、これも次稿以降の課題とする。

注および引用文献

- (1) 大橋英寿『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』弘文堂、1998年4月。
- (2) 薩摩の島津侵略後の琉球王国の中央集権体制強化策の一環として、虚言が世を惑わし、出費をかさませるという理由で、王府高官の向象賢によって1673年にユタへの弾圧が行われた。(1), pp. 59-66 参照
- (3) 1732年、王府高官の蔡温によって、注(2)の際と同様にユタの非合理性や出費が指弾される。ユタ本人とクライアントに加えて村の役人などの監督者も処罰対象としている。王府内におけるシャーマニズムの影響力の排除も目指していた。(1), pp. 67-74, 及び、高良倉吉「首里王府とトキ・ユタ禁圧——近世琉球におけるユタ問題の構造——」『沖縄県史料編集所紀要』10号、1985年3月、pp. 70-94 参照
- (4) 1879年に、東京の日本政府は軍事的示威を加えて琉球処分を断行し、尚泰王に東京移住を強いる。県令・上級役人は日本政府が派遣した。ただし、地方制度・税制・土地制度は温存され、村などの村内法は引き続き有効とされた。県はその内容を届け出させるが、ユタの禁止を村内法に加えるよう、県・村が介入した。(1), pp. 75-81 参照
- (5) 大正2年に那覇で大火があった後、火事についての神託を述べたことであるユタが検挙された。なお、沖縄における初の日刊紙である『琉球新報』は、ユタの検挙・処罰を礼賛している(現在発行されている『琉球新報』とは別系統の新聞である)。(1), pp. 82-114 参照
- (6) 昭和10年代には、内務省・特高警察からの弾圧を受ける。ユタの神託が流言飛語となって情報統制を攪乱することへの恐れからである。(1), pp. 105-114 参照
- (7) 3.2 女性たちの声にて詳述
- (8) 自称や敬意を含む際の呼称としては、「カミンチュ(神人)」や「カミサマ(神様)」や「ムヌンス(物知り)」という表現が用いられる
- (9) エリアーデ, M.『シャーマニズム』冬樹社、1974年11月。
- (10) ルイス, I. M.『エクスタシーの人類学』法政大学出版局、1985年3月。
- (11) 櫻井徳太郎『日本のシャーマニズム』吉川弘文館、1974年11月(上巻)・1977年3月(上巻)。
- (12) 佐々木宏幹『シャーマニズム』中央公論社、1980年9月。
- (13) 奥野克巳「シャーマニズム研究における“治療効果”再考」『民族学研究』63巻3号、1998年12月、pp. 326-337。
- (14) 池上良正『民間巫者信仰の研究』未来社、1999年2月、p. 34。
- (15) 塩月亮子『シャーマニズム復興の近代文化論』2003年、名古屋大学大学院文学研究科博士論文
- (16) 塩月亮子「ユタ的女性祭祀による霊性ネットワークの創出」『宗教と社会』8号、2002年6月、pp. 141-147。
- (17) その嚆矢は、伊波普猷、『沖縄女性史』小沢書店、1919年と佐喜真興英『シマの話』郷土研究社、浜辺叢書17、1925年である。
- (18) 櫻井徳太郎『沖縄のシャーマニズム』弘文堂、1973年7月、渋谷研「対峙する神々」『民族学研究』56巻4号、1992年3月、pp. 361-384。
- (19) 知名定寛『沖縄宗教史の研究』榕樹社、1994年11月、高良倉吉「首里王府とトキ・ユタ禁圧：近世琉球におけるユタ問題の構造」『沖縄史料編集所紀要』10号、1985年3月、pp. 70-94。
- (20) 谷川健一・山下欣一(編)、『南島の文学・民俗・歴史』三一書房、1992年12月。

- (21) 伊藤幹治『沖縄の宗教人類学』弘文堂, 1980年4月, 山下欣一『奄美のシャーマニズム』弘文堂, 1977年9月, リーブラ, W. P.『沖縄の宗教と社会構造』弘文堂, 1974年4月, 及び注(11), (14), (18)を参照
- (22) 注(18), (19)を参照
- (23) 佐々木宏幹「ユタの変革性に関する若干の覚書」『神々の祭祀』植松明石(編), 環中国海の民俗と文化2, 凱風社, 1991年1月, pp. 369-393.
- (24) 新里喜宣「民間巫者の思想・言説から見る現代沖縄の先祖観の諸相: 先祖イメージの変容と都市シャーマニズム研究への布石」『東京大学宗教学年報』第26号, 2009年3月, pp. 115-138, 及び注(15)を参照
- (25) 本文中で紹介した記事の中心部分は参考資料として後掲する。なお引用する記事の文中には現在では不適切とされかねない表現も散見されるが, 当時の状況や認識を伝えるために表記は変更せずに引用する。
- (26) 沖縄県うるま市(中部東海岸)にある町で, 現在の表記では「屋慶名」となる。
- (27) 友寄静隆『なぜユタを信じるか: その実証主義的研究』月刊沖縄社, 1981年8月。
- (28) 琉球新報『トートーメー考: 女が継いでなぜ悪い』琉球新報社, 1980年5月。
- (29) 藤崎康彦『『トートーメー問題』再考』『跡見学園女子大学紀要』35号, 2002年3月, pp. 29-39.
- (30) 堀場清子『イナグヤ ナナバチ: 沖縄女性史を探る』ドメス出版, 1990年1月, 『沖縄女性史研究』第8号, 祭祀(トートーメー)継承と女性, 1992年, 沖縄女性史研究会, など。
- (31) 山里昭子「沖縄におけるユタと精神医療」『沖縄精神医療』2号, 1977年8月, pp. 50-60.
- (32) 高石利博「御嶽信仰と精神科医療の設定 その1」『沖縄精神医療』4号, 1978年5月, pp. 77-80, 高石利博「御嶽信仰と精神科医療の接点 その2」『沖縄精神医療』5号, 1978年11月, pp. 24-36, 高石利博「御嶽信仰と精神科医療の接点 その3」『沖縄精神医療』6号, 1981年4月, pp. 67-78.
- (33) 吉良安之「沖縄の民間巫者“ユタ”のカウンセリング機能の一研究」『健康科学』17号, 1995年, pp. 51-58.
- (34) ユタに相談に行くことを, 「ユタを買う」と表現する。
- (34) 高江洲義英「沖縄の文化と精神医学・医療」『精神神経学雑誌』100巻10号, 1998年, pp. 837-842.
- (36) 塩月亮子「表象としてのシャーマニズム: 沖縄の映画と文学にみるアイデンティティ・ポリティックス」『哲学』107号, 2002年1月, pp. 1-20.
- (37) 池上永一『バガージマヌパナス』新潮社, 1994年12月。
- (38) 岡部隆志, 「成巫譚」『シャーマニズムの文化学』岡部隆志・斎藤英喜・津田博幸・武田比呂男(著), 森話社, 2001年7月, pp. 188-205.
- (39) 栗原まもる『バガージマヌパナス』池上永一(原作), 講談社, 2000年3月。
- (40) 沖縄県「沖縄デジタルアーカイブ「Wonder 沖縄」」(<http://www.wonder-okinawa.jp/>) 2010年10月1日確認
- (41) 嘉手川学『旅の指さし会話帳 国内編①沖縄』情報センター出版局, 2003年7月。
- (42) 森山工「文化資源 使用法: 植民地マダガスカルにおける「文化」の「資源化」」『資源化する文化』山下晋司(編), 弘文堂, 2007年12月, pp. 61-91.
- (43) 例えば, 投稿を集めた掲示板「沖縄のうわさばなし」には, ユタの項目がある。ただし, 「沖縄のうわさばなし」にはそうした断りはないが, ウェブページによっては, 研究のための閲覧・引用を断る記載があるものもある。当該ウェブページに集う人に不快感や負担を与える形での研究は不適切であり, 慎重を期す必要がある。「沖縄のうわさばなし」(<http://098u.com/wp/>) 2010年10月1日確認
- (44) 才津祐美子「世界遺産という「冠」の代償と住民の葛藤——生活の場における「無形民俗文化財」『ふるさと資源化と民俗学』岩本通弥(編), 吉川弘文館, 2007年3月, pp. 105-128.

参考文献

1. 沖縄大百科事典刊行事務局（編）『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社，1983年5月.
2. 新城俊昭『高等学校 琉球・沖縄史』2001新訂・増補版，東洋企画，2001年3月.
3. 渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壮広・塩月亮子・宮下克也（編）『沖縄民俗辞典』吉川弘文館，2008年7月.

参考資料（新聞記事）

「ユタのメッカ屋々名現地ルポ はばきかす生神様
一日も早く改善したいがおびたしい外来者がガン」（琉球新報・1959. 1. 11）

（中略）

屋々名がユタ部落として知られるようになったのはもうずっと以前のこと。戦前はユタがはばをきかせ人々の生活は迷信でがんじめられていた。二三の例をあげると…○…たとえばある家に子供が生まれると、親せきやとなり近所の人々が夜どおし太鼓をたたいてさわぎだす。悪霊を家に入れないためだった。さらに子供が生まれてから五日目には締縄をあんで人々がそれをとりかこみ子供の命が悪霊に盗まれないように門前でがんばったという。また成年祝いなどで祝いを迎える人が他の同年者を訪れてはならないならわしもあった。

（中略）

このほか、同区の近くにヤブチという無人島があるがこれを神の島としてユタたちがあがめ、牛馬を入れるのをかたく禁じていたこともある。牛馬はおろかそのふんでつくる肥料さえも持ちこめず、この禁をおかせば田畑を害虫にあらされ不作がつづくとのならわしであったという。

（中略）

これには科学知識の貧困と、貧しい生活が多く原因しているようだ。睡眠不足が続き、不眠症にかかるとたいていの人々は医者にかかる前にすぐにユタ通いを始める。ユタの長老たちはそれをサーイ（霊がのりうつつた）といい「○○王子のサーイである」などあやしげな文句をならべてその人を新しいユタにデッチあげてしまう。ユタからそういわれると自然におかしな気分になり自分がユタになったと思いきやその道に走った人々は意外に多いようだ。

（中略）

迷信打破は最も緊急な課題となっているが、なかなか思うようには改革できないようだ。第一の困難はユタ信じに来る人はほとんど部外者なので部落人だけはりきっても結局一人ずもうになり失敗してしまう。

（後略）

山城正二「ユタを一掃しよう 合理精神に立つ宗教心育てよ」（琉球新報・1959. 1. 12）

（中略）

最近重大な社会問題とまでなってきたユタ・迷信の問題がある。“なんとか様を信心すれば、病気がなおる”とか“○○様に祈ると金持になる”とか少し人智を働かすだけでい

かにばかけた根拠のないことであるかを知るはずである迷信の言に左右されて、時に重大な生命にかかることさえある。

迷信のはびこることは、特に農山漁村では困難な問題であり、良識ある人たちがおしみにくなく手をとりあって、ユターそうに全力を尽くすべきである。それが社会発展の前進である。

(中略)

私達はいくまでも完全な理性の作用を心にもつことです。かくて宗教は「吾人の敬けんを呼ぶ純粋にして尊敬する心の状態」だといった宗教家がいる。

人工衛星とか月ロケット発射で明けた“宇宙世界”の五九年。過去数年間に世界に生起する一切の動きはめざましい。スピードの時代である。地球そのものの回転までが、急に速くなってきた錯覚をおこす。このような社会で何の根拠もないユタ迷信に迷わされていくようでは、確かに知性の欠かんがあるろう。

(後略)

照屋寛範 (沖縄バプテスト連盟理事長)「ユタについて ― 正しい信仰が必要 ―①」

(沖縄タイムス・1959. 8. 21)

ユタ活動がはじまったのは、おそらく、原始社会のころであろう。日本の例を見ると、紀元前二世紀(ママ)まだ、部落国家をなしていたころ「ヒミコ」と呼ばれる女性の王さまが、神のお告げでよく占いをし人々の尊信を受け、国々をよくおさめたというが「ヒミコ」は今日のユタに類するものであったと思われる。

(後略)

照屋寛範 (沖縄バプテスト連盟理事長)「ユタについて ― 正しい信仰が必要 ―②」

(沖縄タイムス・1959. 8. 22)

(中略)

沖縄でユタの最もバッコしたのは、明治初年の王朝末期で、時の摂政、与那城王子が、ユタ狩りをしたことがあるが、その頃、ユタの親玉は、ことごとく小禄間切のものであったが、これらを全部狩り集めて、首に(チャー)をかけ首里市場に三日間も見世物にし、世間のいましめとしたが、今もって、小禄はユタ国とよばれている(伊波普ゆう氏沖縄女性史による)

こうして、ユタの禁止、排撃は沖縄でも再々行われてきたが何れも成功はしていない。単なる立法処置や、文化運動でどうにもならぬことは、すでに歴史の教えるところである。迷信打破にはどうしても正しい信仰を与える外に道はない。

霊能（サー）の問題

沖縄では、ユタや神職（神人）に対して「サー高産れ」という。これは、死者または、神々の霊と交感のできる人々のことである。口寄、霊媒、降神術者などといい、世界何れの国々にもある。然し、沖縄のユタの場合、彼女らに働きかけて来る霊が多くは、悪鬼悪霊（心理学では低い霊という）である。

沖縄のユタ（霊媒）は、かかって来る相手の霊が、自分は祖先だといえば、祖先と信じ、観音さまだといえば、観音さまと信じ、山岳（サンタキ）泉水（ウビーカワ）の神といえ、その通りに信じて寸分もうたがわない。

これで見ても、彼女らの取次ぐ霊が、低い霊即ち悪鬼悪霊たることが明白である。

（後略）

照屋寛範（沖縄バプテスト連盟理事長）「ユタについて ― 正しい信仰が必要 ―⑤」

（沖縄タイムス・1959. 8. 28）

（中略）

ユタはあてて後に必ず仕事を言いつける。この仕事がよく悪鬼悪霊たることを証明する。

（中略）

人間にもタチの悪い者があって自分で火をつけておいて、自分で消して善人になる者がいる。

「誰れ彼れが、お前のことを何といった。かんといった」でつげ口を言ってサンザ怒らせておいて後でいかようにもなだめるように、慰めるように「でも、ダマっていなさいよ、忍耐しなさいよ、後はわかるから…どうせ彼奴はそんな人間なんだから」という風に、火付け役も、火消役も一人でやる。悪魔もやっぱりこういうことをするのである。一度この手に乗ったら最早その人は、その配下、奴隷になって、今日は彼の御願、明日はこの拝みそれこそ「シツシぬアンマシムノー御願事」である。「男の女郎買いと女のユタ事となおらぬ」とはこのことである。

照屋寛範（沖縄バプテスト連盟理事長）「ユタについて ― 正しい信仰が必要 ―⑥」

（沖縄タイムス・1959. 8. 29）

結 び

かれこれと説いて来たが、このユタ事、迷信なるものは、人が正しい信仰に入らぬ限り、決して打破できるものではない。

（中略）

同よう、皆さんの御祖先にしても、かつて地上にあられた時と同じく、子孫のために幸

せをこそ願っておられ、決して不幸災難を与えられるということはない。

ところで、神のこと、祖先のことを正しく知るには、真の宗教に入らぬ限り、わかるものではない。それで結局、迷信打破運動は、真の宗教運動の外にない。

(後略)

石垣毅「正しい信仰生活を 迷信打破で生活合理化」(琉球新報・1959. 11. 15)

戦後の沖縄は経済・産業・文化とすべての面において、驚異的な復興発展を遂げたといわれる。

(中略)

しかしその反面文明の発達とは逆行するような、いかがわしい新興宗教や迷信、ユタ買などで不合理な生活を営んでいる人たちが数多くいるのは、どうしたわけだろうか。

(中略)

沖縄の迷信が多いのはそれだけ民度？が低いせいなのか。迷信の根源を探り従来の悪い習慣(迷信生活)を是正打破しない限り、決して真の生活改善の実現は不可能である。因襲や迷信によって無駄な出費を重ね、そのあげくは家庭生活の破たんを招くといったのがオチであろう。科学の進歩にしっかりと両眼を見開き、正信による無駄のない合理的な生活の基盤を築きたいものである。

一方迷信と結びついて私たちの弱みにつけ込み、数々の悲劇を招いているのがユタ三世相の跳りょうである。

(中略)

ユタ買いによる無意味な法事を行い、祖先崇拜の念に厚いなどと誇らしげに語る人たちも、この際じっくりと反省して合理的な生活設計を培いたいものである。ユガんだ宗教の狂信、因襲・迷信をわれわれの環境から根こそぎに駆逐して、明るい街づくりにみんなの力を結集しよう。

(内政局出納係)

与世盛智郎「迷信打破について」(沖縄タイムス・1966. 4. 12)

沖縄を外観内容ともに整った文化の国に仕上げるには、一般同胞の人生観、世界観が宇宙時代にたえ得るようにならねばならぬが、そのためには沖縄同胞の生活に深く根差している迷信を打破せねばならぬのである。

(中略)

迷信打破について最も必要なことは、一般同胞の知識の養護と共に感情の発達を完全ならしめることである。知識のみを重視して感情を等閑に付していたら、理性の上では迷信

を否定しながら感情ではとうてい割り切れぬため、せっかく新しい教育を受けている人ま
だが、無学のユタや怪しい祈とう師の手玉にとられることとなるのである。

沖縄の環境は天災地変や人災が多いために、迷信の育つには最も適している。従って狂
信者の団体ができて、迷信者たちに組せず反対する人が村八分にされることもあるので、
理性のみによる迷信打破は効果をもたらしにくいのである。

(中略)

そこで迷信者の感情に深く巣食っている迷信を追い出すためには、それに代わるべき感
情を浄化させる正しい宗教を知らしめねばならぬのである。

今日、人づくりに最も必要なのは、不合理な迷信と共に無神論者を退けて「感情とこわ
さ」を知る人を養成することが大事であるが、そのためにも信ぜぬは別問題として、一般
同胞に正しい宗教への知識を与える必要があると思う。正しい宗教とは「転迷開悟」の教
えとして、科学を否定せずに、人間生活の九分九厘まで支配するといわれる感情を正しい
ものに発達させ、堅固ならしめることである。

(西本願寺開教使)

From the Encumbrance to the Resources

HAMA Yusuke

I analyzed the multi-valuations for Okinawan folk shaman YUTA, with the viewpoint of cultural resource. First, the valuations for YUTA have been changed from the encumbrance to the resources. Second, it has revealed mixture of disputant's position and opinion. As the result, it needs to analyze critically to the movement of cultural resources by government and capitalism.

Keywords: *Yuta, Okinawa*, shamanism, cultural resources